

あるのですから、楽しい協定や住民憲章を考えてみてはどうでしょうか。

このままでは横浜は醜い大都会になってしまいます。都市は文明の象徴ですから、機能的でかつ「美しい横浜」になりますように。

(建築士・市政モニター)

「横浜」にこった煮の味

青木 雨彦 (保土ヶ谷区 46歳)

わが街、横浜のことを「料理にたとえれば、大きな鍋にいろんなものがぶちこまれていて、そのこった煮を誰に遠慮もなく、好きだけドンプリにとって食べられる気ままさがある」と評した友人がいる。どう考えても「美しい皿に盛られた一品ずつが次々に出てくるのを、かしこまって賞味する風情ではない」というのだ。

くやしいけれど、当たっている。たとえば、横浜に生まれ、育った文学者たちをみても、長谷川伸、大佛次郎、吉川英治、獅子文六というふうに、みんな大衆作家だ。これに、横浜で後半生を送った山本周五郎さんを加えれば、そ

のまま日本の大衆文壇の系図ができてあがる。

ビールじゃあるまいし、文学に「純ナマも本ナマもあるものか」というのがわたしの持論だが、この国にはヘンな習慣があって、たか・が・文・学・でも「純文学」と「大衆文学」に分けたがる。そうして、純文学とやらを上置き置きたがる。

しかし、そうだろうか？ ホントに、純文学のほうが大衆文学より上等だろうか？ 文学賞で言えば、純文学は芥川賞で、大衆文学は直木賞だが、ちかごろでは、芥川賞作家より直木賞作家のほうが活躍しているのではなからうか？

その直木賞に由縁ゆかりの直木三十五も、じつは横浜を愛した作家だが、このように大衆作家が輩出するのも、こった煮の街なればこそだろう。純文学みたいに、とりすましたとこないのが、横浜の魅力だ。

だから、横浜の人間には「三代つづかなければ、ハマッ子じゃない」といった気負いはない。わたし自身は、横浜に生まれて、横浜で育った人間だが、北海道で生まれた人も、九州で生まれた人も、いや、アメリカに生まれた人だって、横浜に移り住んだら、その日からハマッ子だろうと思っっている。

言っちゃナンだが、横浜の歴史は新しいのである。例の日米修好通商条約で横浜が開港したのは一八五九年だが、それからだって、まだ百年ちよっとしか経ていない。その間に不幸な戦争があつたけれど、横浜の街づくりはこれからだ。

いまさら、横浜が東京のベッドタウンと化したことを嘆いてはじまらない。横浜に住みながら東京で働く人たちはハマツ子である。わたしたちは、そういう人たちといっしょに、この街を住みよくしていかなばならぬ。

(コラムニスト)

インターナショナル横浜

——人と人のコミュニケーションを大切に——

平野 恒 (南区 80歳)

今の子どもに開港以前の横浜村の話など興味深く話したらおもしろいと思うでしょう。

歴史はすでに百十余年過ぎて、諸外国から横浜に移ってきて現在の雙葉学院の創設者仏人修道女サンドマクチルドラクロの話や、ドイツ医師ベルツ博士、米国人へボン博士

など、それから輸出入による経済的利益、そしてその発展、あるいは当時まだ電燈もない、生きることさえ解らない貧者、病者、文盲の子どもたちのこの頃の事を若い人々に話したら、互いに愛しあう人類愛の精神や、いかなることがあっても生きることの大切さ、すばらしさを悟ってきて人間生涯の興味も湧きおこってくるのではないかとさえ思うのです。

ある日、私は洋光台の附属幼稚園の帰り、十二時半も過ぎているかと思う時、二人の母と三人の子どもに電車で乗りあわせました。「どこに行くの」と尋ねましたら、「回数券を買って鶴見に水泳の稽古に行くの、それから帰るとヴァイオリンの稽古、そして塾に行くんだよ」と子供はごく自然に答えました。一体、母と子のたのしい物語、お母さんが作ってくださったおいしい夕食は、その家庭のどこにいつてしまったのでしょうか。

かつてわが国を故郷として横浜に住み、色々の不自由を忍んで人々をよるこぼせることをしてくださった諸外国人や私共日本人など、みなそれぞれの特徴を入れて、年齢に応じてたのしみながら読みやすく、しかも美しい低廉な本を沢山出版して、子供の余暇の慰めとしたら幼児教育上に